

近年増加するスギ苗木等の被害について

林業試験場 経営環境部 法眼 利幸

〔はじめに〕

近年、コンテナ苗という新たな苗木生産技術が導入されることによって、これまで確認されていなかった病害虫の発生がみられはじめている。また、県内林業の現場において、苗木の良し悪しを判別する知識や病害虫に関する知識や技術が薄れてきている。そのため、対策方法が確立しているはずのスギ赤枯病の被害が再び増加するなど、様々な問題が生じている。

〔材料と方法〕

令和4年、林業試験場に持ち込まれた被害サンプルによる調査、必要に応じて現地調査を実施し、被害発生の原因や要因を明らかにした。

〔結果と考察〕

1) 病害（スギ赤枯病）

山に植栽中のスギ苗（2月）や苗畑（11月）で枯死や部分的に枯れているものがみられ、病斑（図1）や菌核（図2）等からかつて猛威をふるったスギ赤枯病だと考えられた。感染した苗を山に植栽すると林内感染が発生するとともに、幹が垂直方向に腐って陥没する溝腐病が発生するため、植栽済の苗木も抜いて処分するよう指導した。湿度の高い条件下で風により地表近くを孢子（分生子）が飛散するとされるものの、菌は広く蔓延しているため苗木生産時の適切な殺菌剤散布と厳選出荷が必要で、購入者による苗木のチェックも重要である。

2) 虫害

- ① スギ苗木（コンテナ苗、5月、6月）で頂芽部分の枯死がみられ（図3）、被害状況からスギメムシガによる被害であると考えられた。1園地では成虫が確認された。被害部位の下から新芽が出てくるものの、連年被害を受けると成長が悪化するとされる。
- ② スギおよびウバメガシ苗木（両方コンテナ苗、7月）の葉が食害された。枝葉が糸で綴られた部分から採取された幼虫を飼育したところ、これまでスギやカシ類において被害報告のないウスアトキハマキの成虫が得られた（図4）（同定：県自然博物館）。
- ③ ウバメガシ伐採株の萌芽が糸で綴られて食害されていた。容器内で観察したところ、キバガ類（未同定）の成虫が得られた。加害種は明らかにできていないが、ウバメガシ択伐施業を実施することでシカの萌芽食害による株枯死被害と併せた対策となる。

3) 気象害（干害）

植栽されたスギ苗（4月）の40%近くで枯死～衰弱がみられた。植栽直後の令和4年2月の降水量が平年の4分の1以下であったため（図5）、干害が発生したと考えられた。徒長した苗で被害が多くみられ、中でも根に比べて地上部の大きい苗（TR比6程度）にお

いて枯死が顕著であった(図6)。古くから良い苗木とされる「ずんぐりした形状」の苗木で、ほとんど被害はみられなかった。



図1 スギ赤枯病と思われる病斑



図2 スギ赤枯病と思われる菌核



図3 スギメムシガによる頂芽の枯れ



図4 ウスアトキハマキ成虫

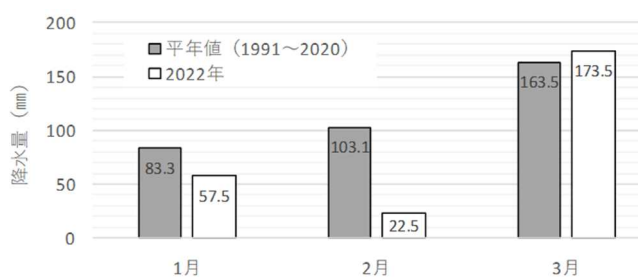


図5 最寄りアメダスの降水量データ



図6 典型的な枯死苗(左)および無被害苗(右)の形状

【参考文献】

安藤裕萌・升屋勇人(2020) スギ赤枯病研究の現状と課題 日林誌 102: 44-53